

# たまげた

報告  
吉里吉里忌  
2021

- ・井上ひさし研究会  
文学サロン
- ・遅筆堂文庫企画展  
…etc.



vol.006

March 2022

# たまげた

報告  
吉里吉里忌  
2021

- ・井上ひさし研究会  
文学サロン
- ・遅筆堂文庫企画展  
…etc.

## 井上ひさし研究会のご案内



写真：佐々木隆二

当研究会は、井上ひさしの作品や業績を深く理解し、広く長く後世に伝えていくことを目的としています。

井上ひさしは、小説やエッセイ、コントや戯曲などの執筆活動だけではなく、社会的な問題に関しても積極的に発言、行動しました。その分野は多岐にわたり、著作はもちろんのこと、膨大な数の蔵書や資料や記録が残されています。このように多方面にわたった井上ひさしの全体像をとらえるには、多くの方々のご参加とさまざまな方向からの研究が必要です。

井上作品を愛するみなさまのご入会をお待ちしています。

### 入会条件

井上ひさし作品を読んだことがある、もしくは、井上芝居を観たことがある方であれば、どなたでもご入会できます。年齢などの制限はありません。



文学サロン（川西町フレンドリープラザ）



文学サロン（遅筆堂文庫分室）

### 年度会費

【個人】3,000円  
【団体・法人】5,000円  
(4月1日から翌年の3月31日まで)



ご入会いただいた方には、井上ひさし情報が詰まった「通信」を年3回程度お届けします。また、研究会主催の講演、講座の先行予約、参加費の割引などの特典があります。

入会あるいは資料請求をご希望の方は、下記の連絡先までお気軽に問い合わせください。

### 井上ひさし研究会事務局（川西町フレンドリープラザ内）

〒999-0121 山形県東置賜郡川西町大字上小松1037-1  
Tel:0238-46-3311 Fax:0238-46-3313  
Email:chihitsudo@kawanishi-fplaza.com

### お問合せ

# 「川西町役場新庁舎とフレンドリー・プラザ」

これまで羽前小松駅の西側にあった川西町役場が移転し、2021年5月6日に開庁した、新しい庁舎です。フレンドリー・プラザとの距離が近くなり、昼休みにはプラザのロビーを訪れる役場職員の方もいらっしゃいます。



03 第7回吉里吉里忌2021

「井上芝居の想い出」

お話と歌 大竹しおぶ

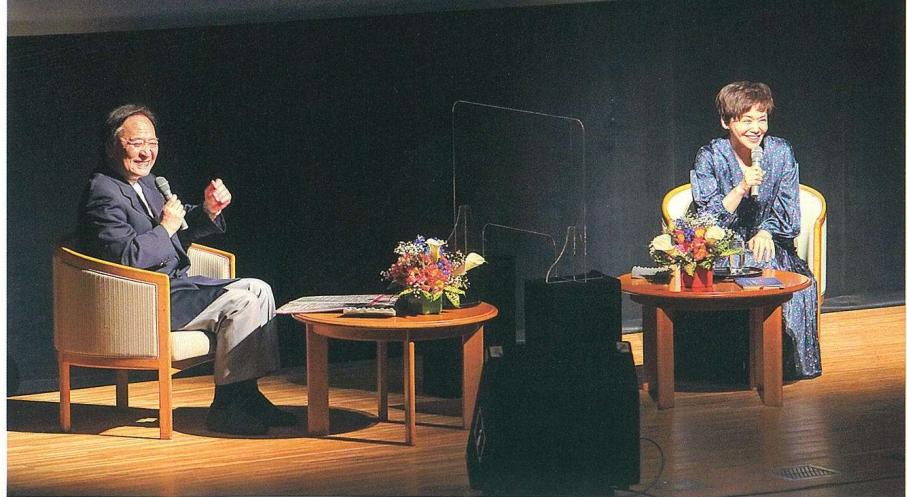
朴勝哲（ピアノ）

井上ひさしのエッセイ／井上ひさしの対談

「あのとき この人とこんな話」

(位置関係は左の写真をご覧ください)

- 04 フレンドリー・プラザのすぐ隣には、東北地方最大級の前方後方墳である天神森古墳があります。役場から徒歩で約5分のところにある農村環境改善センターは、1987年、運筆堂文庫が最初に開設された場所です。
- 05 運筆堂文庫2021年度企画展  
井上ひさしのエッセイ／井上ひさしの対談
- 06 もうひとつの「本の海」  
（井上ひさしの雑誌）
- 07 運筆堂文庫分室見学会  
「井上芝居の想い出」
- 08 学芸員ノート
- 09 私がおすすめする井上ひさし この3冊  
第1弾「井上恒が語る井上ひさし?」
- 10 運筆堂文庫分室のこれまでとこれから  
第2弾「井上ひさしの8万5千冊  
～雑誌整理の現場から～」
- 11 運筆堂文庫利用案内  
「井上ひさしとチエーホフ その1」
- 12 井上ひさし研究会のご案内  
第8回吉里吉里忌2022予告
- 13 文学サロン2021 井上ひさし研究会  
編集後記



写真右=大竹しおぶ 左は司会の古屋和雄（元NHKエグゼクティブアナウンサー）

## 吉里吉里忌 2021 2021年4月11(日)

### 講演 「井上芝居の想い出」

お話と歌 大竹 しおぶ

2010年に亡くなった井上ひさしをしのび、その業績を語り継ぐ「吉里吉里忌2021」。今回は、井上作品への出演経験のある女優・大竹しおさんが、その当時を振り返った。

最初に、2004年5月に川西町フレンドリー・プラザで行われた「太鼓たたいて笛ふいて」の公演について触れ、「カーテンコールの際に、一番前に座っていたお客様の一人が立ち上がりて役者に向かって深々とおじぎをしたのが印象的だった」と話した。

大竹さんが初めて出演した井上芝居は「もの黙阿弥」（1983年）。稽古が始まつても台本ができるいなかつたので、一方どれだけ遅れても、相変わらずのんびり構えていた人もいたという。

大竹さんは台本の読みが稽古場に届くのを「号外が来た」と喜び、「新しい話が井上さんの特徴的な文字を通して私の中に入ってくるのがとても幸せだった」と語った。素晴らしい言葉を、芝居を通して観客に伝えられる仕事が役者であり、その幸せを日々噛みしめていたという。

新国立劇場「夢の裂け目」（2001年）の公演初日、劇場に来ていた井上に、大竹さんは「また芝居に出たい」と直

談判したという。その願いが叶い、「太鼓たたいて笛ふいて」（2002年）で出演を果たすことになる。

統いて、「井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法」（講談社）の一部を朗読。憲法9条に込められた願い、平和への祈りを声に乗せた。井上の遺した言葉が、大竹さんの声を通して会場全体に静かに染みわたっていった。

井上芝居の奥深さは、台詞だけでなく、ト書きにも表れて死したはずの元行商人の時男がボロボロになって帰つてくる。

そこに美美子が「おかえりなさい」と声をかけるシーン。ト書きには「全世界の愛を込めて」とある。ト書きの奥深さと、それを伝える役者の表現力が芝居の感動を生み出している。

大竹さんは、印象に残った台詞として、林美美子の劇中最後の台詞「休んでいるひまはないんだわ。書かなくては。書かなくてはね」を挙げた。この台詞は井上が自分自身に対し

てかけていた言葉でもあったと解釈し「この場面は、自分が井上さんになつたつもりで演じていた」と舞台裏を明かした。

最後に、「劇場で生のものに触ることで伝わる波動を明日への活力にしてもらいたい」とメッセージを残し、講演を締めくくった。

企画展 I

## 井上ひさしのエッセイ

会期：2021年4月27日(火)～7月25日(日)

井上ひさしは小説のほかに多くのエッセイを残している。直木賞を受賞してまもなく1974年の『家庭口論』に始まり、晚年の2009年の『ふふふ』、さらに没後にまとめられた『日本語教室』など、その数は20冊以上に及ぶ。しかしそれでもなお、雑誌や新聞などで掲載されたままで書籍化されていないものも多い。

井上没後10年の2020年『井上ひさし発掘エッセイ・セレクション』(岩波書店)3冊が出版された。『社会とことば』(芝居と周辺)『小説をめぐつて』と題されたエッセイ集は、取りこぼされていた珠玉のエッセイ集である。3冊目の『小説をめぐつて』の中の「3. 交友録」(先達を仰いで)は先輩作家松本清張、司馬遼太郎等への熱いおもいが、(ライバルにして友人)では、藤

井上ひさしは小説のほかに多くのエッセイを残している。直木賞を受賞してまもなく1974年の『家庭口論』に始まり、晚年の2009年の『ふふふ』、さらに没後にまとめられた『日本語教室』など、その数は20冊以上に及ぶ。しかしそれでもなお、雑誌や新聞などで掲載されたままで書籍化されていないものも多い。

井上ひさしは小説のほかに多くのエッセイを残している。直木賞を受賞してまもなく1974年の『家庭口論』に始まり、晚年の2009年の『ふふふ』、さらに没後にまとめられた『日本語教室』など、その数は20冊以上に及ぶ。しかしそれでもなお、雑誌や新聞などで掲載されたままで書籍化されていないものも多い。

井上ひさしは小説のほかに多くのエッセイを残している。直木賞を受賞してまもなく1974年の『家庭口論』に始まり、晚年の2009年の『ふふふ』、さらに没後にまとめられた『日本語教室』など、その数は20冊以上に及ぶ。しかしそれでもなお、雑誌や新聞などで掲載されたままで書籍化されていないものも多い。

## 発掘エッセイ

# 2021年度企画展

遲筆堂文庫



『発掘エッセイ・セレクション』  
岩波書店 2020年発刊



雑誌に掲載されただけで書籍化されていない対談を紹介  
(遅筆堂文庫所蔵資料)

企画展 II

## 井上ひさしの対談 —あのとき この人とこんな話—

会期：2021年7月27日(火)～11月7日(日)

井上ひさしは出版社や新聞社の企画などで400回以上対談を行っている。対談の相手は作家や演劇関係者はもちろん、芸能界、スポーツ界など200人余りの多彩な顔触れだ。その中から企画展では意外な人との対談を紹介した。

長嶋茂雄さんとの対談では、野球少年時代の話で盛り上がり、阿木燿子さんは言葉を生み出す面白さや苦悩に共鳴し合っている。(「自分さえも孝えていたなかつた言葉に迫りついて、まずは自分がびっくりして初めて読むほうがあがびっくりする。」という言葉選びの苦心談で盛り上がっている。)

どのような人とも話が間断なく広がっていく。井上の知識量と相手を遇する姿勢に改めて驚かされる。

雑誌の中で語られた意外な人物との対談。第2弾を期待する声もあり、今後も定期的に開催ていきたい。

雑誌「週刊朝日」1979年5月11日号

## 意外な人物との対談！



『発掘エッセイ・セレクション』  
岩波書店 2020年発刊



雑誌に掲載されただけで書籍化されていない対談を紹介  
(遅筆堂文庫所蔵資料)

井上ひさしは出版社や新聞社の企画などで400回以上対談を行っている。対談の相手は作家や演劇関係者はもちろん、芸能界、スポーツ界など200人余りの多彩な顔触れだ。その中から企画展では意外な人との対談を紹介した。

長嶋茂雄さんとの対談では、野球少年時代の話で盛り上がり、阿木燿子さんは言葉を生み出す面白さや苦悩に共鳴し合っている。(「自分さえも孝えていたなかつた言葉に迫りついて、まずは自分がびっくりして初めて読むほうがあがびっくりする。」という言葉選びの苦心談で盛り上がっている。)

どのような人とも話が間断なく広がっていく。井上の知識量と相手を遇する姿勢に改めて驚かされる。

雑誌の中で語られた意外な人物との対談。第2弾を期待する声もあり、今後も定期的に開催したい。

# 大竹しのぶ ミニ・コンサート



トークの後、朴勝哲さんのピアノ演奏とともに、「太鼓たたいて笛ふいて」の劇中歌が披露された。劇中では他の役者が歌うものもあり、大竹さんの歌声で聴ける貴重な機会となった。楽曲の詳細は以下の通り。

### 1 「ドン！」

劇の冒頭で場面設定や登場人物について説明する歌。登場人物6人全員で歌われる。

### 2 「女給の唄」

『放浪記』で一躍人気作家となった林美美子は、流行歌の作詞を依頼される。真面目に取り合わない美美子にしびれを切らした音楽プロデューサーの三木が『放浪記』の内容をもとに作詞したもの。チャイコフスキーのメロディに乗せて、明るく歌い上げる。

### 3 「文字よ 飛べ飛べ」

信州へと帰ろうとする活動家のこま子を引き留める美美子の母・キクに対し、こま子は「文字が書けるようになったのだから、手紙を書いてほしい」とキクに諭す。

### 4 「滅びるにはこの日本、あまりにすばらしそう」

従軍記者として美美子が目あたりにしたものは、東アジア植民地の解放を大義名分とした、日本軍による侵略と暴挙であった。「きれいに負けるしかない」と主張する美美子に「日本が嫌いなのか」と問い合わせる三木と、憲兵の四郎。それに対して美美子は「私は日本が大好きなんだ」と訴える。

### 5 「ハレルヤ」

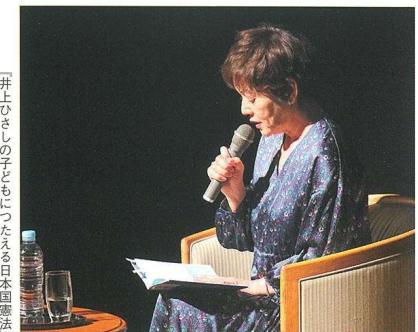
終戦後、美美子は贖罪するかのように、戦争によって傷ついたごく普通の日本人の悲しみを、命を燃やして、ただひたすらに書き続けた。「ハレルヤ」は、美美子が亡くなったあと、遺骨を囁むシーンで歌われる。

トークと歌で井上芝居の魅力を存分に伝える2時間となった。

### 講師紹介

大竹しのぶ (おおたけ・しのぶ)

1957年生まれ。東京都出身。1975年、映画「青春の門」のヒロイン役で本格的デビュー。同年、朝の連続テレビドラマ小説「水色の時」に出演し、国民的ヒロインとなる。以降、気鋭の舞台演出家、映画監督の作品には欠かせない女優として映画、舞台、TVドラマ、音楽等ジャンルにとらわれず才能を発揮し、話題作に次いで出演。世代を超えて支持され続けている。名実ともに日本を代表する女優である。井上作品の舞台出演は、「もとの黙阿弥」、「太鼓たたいて笛ふいて」、「ロマンス」、「日の浦姫物語」。



「井上ひさしの子子どもにつたえたる日本国憲法」

## 個人教師でもあります

また遊び友達でもあつた雑誌

日時：2021年10月24日  
場所：遼筆堂文庫分室（川西町交流館あいぱる内）

保管されている雑誌を手に取り「懐かしい」「昔うちでも読んでいた」といった参加者同士のやりとりも活発に行われた。

川西町交流館あいぱる2階の遼筆堂文庫分室にある整理済みの雑誌の中から、「子供の科学」「誠文堂新光社」「アングル」「主婦と生活社」など、井上さんがエッセイで紹介した雑誌や、「現代農業」「農山漁村文化協会」「エコノミスト」「毎日新聞社」などの、作品執筆や講演において資料として使用した雑誌を紹介。

愛読書であり、所蔵期間も長い「週刊ベースボール」「ベースボール・マガジン社」や「医学のあゆみ」「医療雑誌」は、未完の長編小説『黄金の騎士団』（講談社）の中にも登場する。

実名で作中に登場する

雑誌は、物語と現実世界との距離を近づける役割を果たしている。



エッセイ「雑誌と私」で紹介された雑誌

## もうひとつの「本の海」～井上ひさしの雑誌～

会期：2021年11月9日(火)～2022年2月13日(日)



遼筆堂文庫分室

## 文学サロン2021 井上ひさし研究会

地域おこし協力隊・遼筆堂文庫研究員として活動している2名が、日頃の調査・研究活動について報告する文学サロンが開かれた。以下、その概要を紹介する。

### 第1弾

#### 「井上恒が語る 井上ひさし！」

井上ひさしの（笑い）について

日時：2021年8月29日  
場所：フレンドリープラザ ギャラリー

#### 井上ひさしの8万5千冊

林 俊宏

### 第2弾

日時：2021年12月19日  
場所：川西町交流館あいぱる

#### 「雑誌整理の現場から」

井上 俊宏

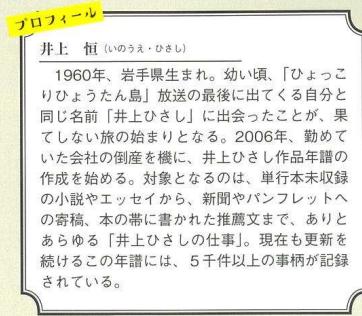
## 井上ひさしとチエーホフ その1

井上ひさしがシエイクスピアと並んで最も尊敬していた劇作家がチエーホフであった。井上が戯曲を書く際は、登場人物によく「結合と離散」を繰り返しながら作っているが、自身が述べているが、チエーホフの作品も同じ構造である。

井上ひさしがシエイクスピアと並んで最も尊敬していた劇作家がチエーホフであった。井上が戯曲を書く際は、登場人物によく「結合と離散」を繰り返しながら作っているが、チエーホフの作品も同じ構造である。

井上ひさしがシエイクスピアと並んで最も尊敬していた劇作家がチエーホフであった。井上が戯曲を書く際は、登場人物によく「結合と離散」を繰り返しながら作っているが、自身が述べているが、チエーホフの作品も同じ構造である。

井上ひさしがシエイクスピアと並んで最も尊敬していた劇作家がチエーホフであった。井上が戯曲を書く際は、登場人物によく「結合と離散」を繰り返しながら作っているが、自身が述べているが、チエーホフの作品も同じ構造である。



## 遼筆堂文庫分室見学会

今年4月から地域おこし協力隊・遼筆堂文庫研究員として活動する井上恒さんが、「笑い」を軸に井上作品を紹介する文学サロンが開催された。今回、恒さんが取り上げたのは、将軍の足しのために仕える「尿簡便」を描いた「おれたちと大砲」や、手段を選ばず殺人以外のことは何でもやる」がモットーの剛腕セレスチス」は唯一の主役の「さそりた

これまで、文庫研究員として活動する井上恒さんが、「笑い」を軸に井上作品を紹介する文学サロンが開催された。今回、恒さんが取り上げたのは、将軍の足しのためには、尿簡便」を描いた「おれたちと大砲」や、手段を選ばず殺人以外のことは何でもやる」がモットーの剛腕セレスチス」は唯一の主役の「さそりた

これまで、文庫研究員として活動する井上恒さんが、「笑い」を軸に井上作品を紹介する文学サロンが開催された。今回、恒さんが取り上げたのは、将軍の足しのためには、尿簡便」を描いた「おれたちと大砲」や、手段を選ばず殺人以外のことは何でもやる」がモットーの剛腕セレスチス」は唯一の主役の「さそりた



分室に所蔵されている主な雑誌

総合誌	「中央公論」「世界」「現代」「文藝春秋」
週刊誌	「週刊文春」「週刊朝日」「毎日グラフ」「週刊現代」
文芸誌	「文學界」「すばる」「小説新潮」「群像」
スポーツ誌	「週刊ベースボール」「Number」「サッカーマガジン」
科学誌	「ニュートン」「ナショナルジオグラフィック」「科学朝日」
経済誌	「エコノミスト」「東洋経済」「ダイヤモンド」「プレジデント」
映画誌	「キネマ旬報」「ロードショー」「スクリーン」
演劇誌	「シアターガイド」「悲劇喜劇」その他各劇団の広報誌

## トウシはやらないけれど トウシは燃える！

遠藤 敦子

2021年の流行語の一つに「親ガチャ」という言葉がある。硬貨を入れてレバーを回すとカプセルに入った玩

にわたり夕刊フジに孤児たちを主人公にした小説「黄金の騎士団」という小説を書いた。その連載にあたり前口上

チヤ「何が出てくるかは運しないとどうそれを、親も同じだと意味の造語だ。井上は、1988年から1年にわたり夕刊フジに孤児たちを主人公にした小説「黄金の騎士団」という小説を書いた。その連載にあたり前口上

でこんなことを言っている。

どんな子どもであれ自分の生まれる時と所を自分で選ぶことはでき

ない。

まさに親ガチャだ。井上自身もそのような境遇を引き摺りながら作品を書いていたことも事実である。

「黄金の騎士団」は、養護施設に入られた孤児たちが先輩の青年とともに自分たちの力だけで生きていこうとする話である。その生活の方策が投資。

井上は株や投資について様々な資料を集めている。実際に某証券会社の「週報」やその投資相談室から「日経株価

の推移表」まで取り寄せており、投資相談室のほうでは頗つてもないお客様が実際に投資をしてくれるのだろうかどう

だろか？ 井上は次のような丁寧な返事

（ファックス）を送つていて。これを丹念に読み込んでせつせつとファイ

ルしていく。それが7冊にもなった。

投資相談室の担当者はいつになつたら次へと資料を送り続けた。井上はそ

れを丹念に読み込んでせつせつとファイ

ルしていく。それが7冊にもなった。

いるのです。ここに株という新手が加わったら神経がボロボロになってしまいます。それに小生は一度始めると狂ったように熱中してしまったので、本式に株を勉強し始めるちがいない…。そうなると本業（書くこと）がお留守になる一というわけで、小生は自分の本性がおそろしいので今日は見送らせていただきます。（後略）

—著作権継承者許可済—

手紙を読んだ投資相談室担当者はがっくりと肩を落としだろう。机の脚を蹴つたかもしれない…。

A証券会社の担当者さま、作家井上ひさしは自分で書いて

いるように「一度始めると狂ったよ

うに熱中してしまう」鬱志家でした。

その証拠が、集めに集めた運筆堂文庫22万冊の蔵書群です。



夕刊フジ 昭和63.6.7付  
連載に先立ち書いた前口上。  
イラストは山下勇三が担当した。



### 「ひつちの「イチロー」も半端ない！ 『野球盲導犬チビの告白』



### むずかしい日本語を、 やさしく、ふかく、おもしろく解説 『井上ひさしの日本語相談』



### 誰よりも本を愛し、本に愛された作家 が贈る「本へのラブレターアーク」 『本の運命』

初出：「週刊小説」（実業之日本社）

1978年7月7日号～1980年1月25日

盲目的天才野球選手・田中一郎とその盲導犬（雑種）チビのタッグが、人間離れしたスーパー・プレーの連発でプロ野球界に旋風を巻き起こす、痛快スボーツ小説。

読売ジャイアンツが敵役として描かれているので、巨人ファンの方はご注意を。岐阜県出身で中日ファーンの私はもちろん楽しめたのだが（笑）。

エンターテインメントとしての軽妙さ、荒唐無稽さの隙間から現代にも存在する社会問題の数々（スボーツに政治を持ち込むことは非・福祉政策や差別についてなど）を投げかけてくる。40年以上前に書かれた物語だが「果たして今の日本は當時よりもなくなつたのだろうか」と考えてしまう。

没後10年に合わせて発売された新装版は文字が大きく、読みやすい。球界きっての諸書家・菊池雄星選手による解説も一読の価値あり。この作品を楽しめた方には、同じく犬が主人公の「ドン・松五郎の生活」もおすすめ。

初出：「週刊朝日」（朝日新聞社）

1986年8月8日号～1992年5月29日

読者から寄せられた日本語についての素朴な疑問に、日本語の達人が答える連載「日本語相談」のうち、井上ひさしの回答分をまとめたもの。根拠となる資料を丁寧に示しながらも、自らの視点を交えて多角的に解釈し、かつ読みものとしても面白くなるよう仕上げている。

例えば、「車や飛行機が「走る」「飛ぶ」というのに、なぜ船は「泳ぐ」といわないのか」という質問。

まず、資料を読んでいた重役が、部屋に入ってきた部長を見る場面を想定し「視線を走らせる」あるいは「飛ばす」「泳がせる」と描寫した際のニュアンスの違いを説明。続いて、それまでの漢字の成り立と解説、「泳ぐ」の用例を雑誌「相撲」（ベースボール・マガジン社）から引用し、更には「日葡辞書」を引きよと縦横無尽に展開していく。

新装版の解説は、国語辞典編纂者の飯間浩明氏。井上が回答に迷つた質問についての補足もあり、新たな視点を提供してくれる。

初出：「本の話」（文藝春秋）

1996年6月号～9月号

山形県南部の田舎町で産まれ育つた少年が、本とともに歩み、やがて作家となり、その足跡が「運筆堂文庫」という一風変わった図書館を形作るまでの半生を記したエッセイ。本書を読んでから運筆堂文庫を訪れれば、感動が倍になること間違いなし。

その1「オットと思つたら赤鉛筆」に始まる「井上流の読み方十箇条」も本書に収録されている。その中で特に私が感心したのが、その6「大部な事典はバラバラにしてよ」。

とある資格試験の勉強をしていたときのこと。参考書があまりに分厚かったので、章ごとにカントーラーで切つて、背をガムテープで補強し持ち歩いていた。まさにルイ・フィリップの教え「困難は分割せよ」の実践である。

持ち運びやすくなるのはもちろんのだが、一旦汚すことへの抵抗感もなくなる。心理的負担を減らせるので、「分厚い参考書を見るだけ気が滅入る」という方にはぜひおすすめしたい。

# 遡筆堂文庫分室のこれまでとこれから

私がこの3年間を通して取り組んできた活動の一つに、遡筆堂文庫分室(フレンドリープラザから車で10分ほどの場所にある施設「川西町交流館あいぱる」2階)内の雑誌資料の整理作業がある。2015年から資料の搬入を開始し、昨年、雑誌の発行年別整理が一通り完了するまで、実に6年の歳月を要したが、そのうちの約半分に直接関わったことになる。



遡筆堂文庫分室には、井上が亡くなるまで鎌倉の自宅に所蔵していた資料も保管されている。可動式の書架も鎌倉から移設されたもの。

## 遡筆堂文庫分室での3年間を振り返る

私が初めて雑誌整理作業に参加したのは、2019年の6月、すなわち着任から2か月後のことであった。最初は、新しく到着した雑誌をプラザから運び入れたり、逆に、プラザで保管するための資料を分室から運び出したりする作業が多くなった。建物にはエレベーターがなく、2階の分室まで雑誌を上げるのは決して楽な作業ではなかった。

1年目は、フレンドリープラザ職員数名が交替で作業を行う中に、時折参加する形となつた。元は中学校の教室であった部屋の後方にある、かばんを入れるための生徒用ロッカーを活用し、週刊誌を発行年ごとに仕分けしていたのを覚えている。

2年目は、プラザ職員の方以外にも手伝つてもらい、みるみるうちに部屋が片付いていった。このあたりから、作業の全体像が見え、もうやりがいのある仕事となつた。分室そのものにも愛着が湧き、作業を行う火曜日と木曜日が待ち遠しくなつていた。

3年目は、前年から来ている方のうち1名に、継続してお手伝いいただいた。所蔵雑誌の出版年月を丁寧に記録してくださるので、後から探しすきにとても助かった。珍しい経験を多くされてきた方で、休憩時間にはいろいろな話をしてくれた。山形県のことだけでなく、昔のテレビ番組や、裁判傍聴について、渡島の少し変わつた葬式の風習など、自由自在に展開する話題に毎回驚かされた。

昨年10月、着任当初から関わっていた雑誌の整理がようやく完了した。雑誌の所蔵期間を調査するために作成した帳簿には、いつの間にか500種類近くの雑誌が記録されていた。

遡筆堂文庫分室には、雑誌以外にも、新聞やリーフレット、その他未整理の資料がまだ大多数眠つている。今後、それらの資料を整理していくうちに、今まで考えもしなかつた分室の新しい活用法が浮かび上がるかもしれない。

地域おこし協力隊・遡筆堂文庫研究員として3年間を通して行った分室の整理作業によって、井上さしが遺した膨大な「活字の海」を解明かすための道しるべを少しでもつけることができたのなら、これほど嬉しいことはない。

(林 優宏)

企業や団体が販売促進や広報のために発行するPR誌。見見するたび「あの会社がこんな雑誌を！」「こんな団体があったなんて！」という驚きの連続。



日本各地のローカル文芸誌が集まるのも分室の特徴。

## 《遡筆堂文庫利用案内》

### 《著者・編集者プロフィール》



林 優宏(はやし・としひろ)

1988年岐阜県生まれ。映画館等での勤務の後、2015年より青年海外協力隊としてアフリカのガーナ共和国に派遣。職業訓練校の生徒を対象にパソコンの使い方を教える。

2019年4月より川西町地域おこし協力隊・遡筆堂文庫研究員として活動。

## 文庫分室を活用した文献調査の一例

今後の井上ひさし研究における雑誌資料の活用方法の一つとして明確でない引用元もしくは参考文献の特定が考えられる。井上



「週刊ホテルレストラン」(オーパバブリケイションズ)  
宿泊・飲食業界の経営者や従業員を主なターゲットとする業界誌。

のエッセイや講演録では、引用あるいは参考にした雑誌名は記されても、何年のどの号であるかは記されていない場合もある。雑誌名さえ分かつていれば、作品の出版年や講演の日付などの情報から、ある程度時期を絞り込める。そこからは1冊ずつ实物にあたるしかないが、発行年順に整理する前と比べると、この作業の労力が大幅に減少した。

具体例を紹介しよう。企画展Ⅲ(6頁参照)で展示した資料の中に、連載エッセイ「やぶにらみ情報研究」第10回「森永の広告文を読みで」がある。そこで挙げられている、小柳輝一著「近代飲食業への軌跡」が、いつ「週刊ホテルレストラン」に掲載された記事であるかを特定するまでの流れを図にまとめてみた。(右図参照)の「週刊ホテルレストラン」は、紙質のせいか、1冊が見た目以上に重い。取り出してページをめくるだけであつても、数十冊となる次第に腕が上がらなくなつてくる。発行日順に並べておいて本当によかったです。

「森永の広告文を読んで」が掲載された「新潮45+」は1985年1月号=参照元はそれ以前の発行

↓  
分室にある「週刊ホテルレストラン」の所蔵範囲を確認=1980~87年

↓  
執筆時期に近いと思われる1984年後半の号を確認。連載回数から「近代飲食業への軌跡」は1981年4月に連載開始と推測。連載が進むにつれて、明治→大正→昭和と扱う時代が新しくなることが判明

↓  
「森永の~」では、大正時代のおやつの習慣を取り上げている=連載初期の記事と推測

↓  
連載開始から1冊ずつ記事を確認し、連載第17回(1981年8月21日号)が参照元の記事であることを特定

「森永の広告文を読んで」の参照元記事を見つけるまで

## 《編集後記》

山形の思い出といえば、やはり温泉です。

全市町村に温泉があると聞き、県内全市町村の温泉に入ろうと思立つたのが2年ほど前のこと。特に印象に残っているのは、米沢市にある大平温泉です。

標高千メートル以上の山奥にあり、駐車場から急な坂道を20分ほど下つたところにある、まさに秘湯。宿泊もできる温泉施設がボソンと1軒だけ。電気も水道もない、車も通れない場所に宿を作ってしまうことに驚かばかりです。川のすぐ横で、とても景色が良かつたのですが、駐車場まで戻るときの急登り坂のせいで、余計に疲れてしましました。

この他には、飲んで美味しい小野川温泉(米沢市)、石膏苦硝泉(傷によく効くらしい)という珍しい泉質の天神乃湯(山形市)、日によって温泉の色が変わるというテルメ柏陵健康温泉館(大江町)、そして一番お世話になった浴浴センターなど(川西町)などなど、入ってよい、飲んでよい、散策してよいの個性豊かな温泉を存分に楽しませていただきました。



【開館時間】  
○火～土曜日 午前9時30分～午後7時  
※冬期間(12月～3月)  
午前9時30分～午後6時  
○日曜日・祝祭日 午前9時30分～午後5時  
【休館日】  
月曜日(祝日の場合は開館)・祝日の翌日  
年末年始・蔵書点検期間  
TEL／0238-46-3311  
FAX／0238-46-3313  
メール／info@kawashishi-plaza.com  
〒999-0121  
山形県東置賜郡川西町大字上小松1037-1